

ノソング会長時代、彼自身の発意によって始められた教会活動の一つに鼓笛隊がある。教会設立と同時に続けられてきた「憩の家」診療所活動に代わるものが、教会として必要だった。そこでノソング氏が注目したのが毎日教会に出入りする多くの子供たちだった。参拝に来る子、診察のために訪れる親に連れられて来る子など広い教会敷地内では絶えず子供の姿があった。この子供たちに何かできないだろうか。日本で鼓笛隊を見たことのあるノソング氏が、コンゴでもその活動を行いたいと考えたのは当然のことであった。

彼の思いに、コンゴブラザビル出張所としても全面的に協力した。海外伝道部（現在の海外部）と連絡し合ってさっそく現地人指導員の育成、そのためのおぢば研修プログラムが検討された。現地では指導員の人選が進められ、人柄や信仰姿勢、音楽的センスなどを考慮して、すでによろぼくであったチャカカ・ニコラ氏が選ばれた。

1977年7月、おぢばでの鼓笛研修が行われた。研修は少年会が担当した。言葉が通じない中での研修は、容易ではなかったようだ。しかも、鼓笛隊が演奏するような曲はコンゴで流れる音楽とメロディやリズムが大きく異なっており、彼は慣れるのにかなりの時間を要したようだ。それでも予定の2ヶ月が過ぎ、一曲がようやく仕上がった。定番とも言える「鼓笛隊マーチ」である。楽器を揃え、新調したドラムメジャーの服と共にチャカカ氏は帰途についた。脳裏には子供たちの先頭に立ち、シグナルバトンを振る姿が想像されていたのではないだろうか。

教会に戻った彼は、すぐに鼓笛隊結成にとりかかる。対象となる子供には事欠かない。「Fanfare」（鼓笛隊の仏訳）の結成は地域住民に大きな反響を呼んだ。コンゴには子供を対象としたこのような活動がないので、なおさらのことであった。ただ、初めてファイフを手にする子供たちに教えるのは相当の苦労があった。行進練習も平行して行われた。当時は鼓笛隊のユニフォームもなく、また教外への発表の機会もなかった。レパトリーはチャカカ氏がおぢばで学んだ『鼓笛隊マーチ』の1曲のみ。それでも鼓笛は子供たちの大きな楽しみであったようで、週末の練習が1年間続けられた。

1年後の1978年には、少年会本部から三濱善寿氏が鼓笛指導のためコンゴへ2ヶ月の予定で派遣された。これは、日本人鼓笛指導者の派遣を願うチャカカ氏の思いに応えたものだった。「日本から講師が来る」という話はすぐに広まり、練習日には教会に多くの見物人が集まった。入隊希望者も当然増えた。楽器が足らず入隊を断らざるを得ないこともあったという。この時、鼓笛隊のユニフォームが初めて揃えられた。真新しいユニフォームを着て、教会周辺でデモンストレーションのパレードを行った。周りからの羨望のまなざしを受けて、子供たちはどれほど誇りに思ったことであろう。その中には、今日の教会活動の中心的な役割をしている者の姿が見受けられる。教会の夕勤め後に現地語でよく歌われていた「おやがみさま」や「ひのきしんのうた」が鼓笛隊の新たなレパトリーとしてこの時期に加わった。また翌年の1979年には、同じ目的で上田年喜氏が少年会から2ヶ月の予定で派遣された。さらに充実した鼓

笛隊活動が続けられていた。

その後も鼓笛隊活動は途切れることなく続けられていく。天理教の教会には子供たちだけで組織されてい



る楽隊があるという話は市内にも広まっていった。それと同時にあちらこちらから演奏依頼を受けるようになり、それが子供たちの励みとなった。練習はもっぱら毎週末にチャカカ氏の指導の下で行われていたが、そのころには、子供たちの中でも指導できるような人材が出てきたようである。現在、教会役員として勤めるマサンバ・アンドレ氏はそうした指導層の一人であった。教会で育ったとも言えるくらい、幼い頃から教会に出入りしていた彼にとっては、教会は我が家のようなものだった。鼓笛隊の発足時には16歳だったが、隊員の一人として参加した。その彼がチャカカ氏のアシスタントとして指導をするようになり、活動を支えるようになっていく。そしてチャカカ氏が鼓笛隊活動の第一線から引いた後は、このマサンバ氏が中心となって活動が継続されていった。

その後も、鼓笛隊活動は途絶えることはなかったが、新しい隊員が加わることもなく、徐々に数も少なくなっていく。楽譜を読める者が一人もいないので、新しい曲を加えられることがなく、今までのレパトリーを繰り返すだけとなった。隊員の顔ぶれが変わらない中で、細々とではあるが活動は続けられた。折しも、ノソング会長と出張所の関係に亀裂が生じ始めていたころでもあり、教会の活動に出張所が積極的に関わっていくことができなかった。そうして約4年の歳月が流れた。

1986年、当時パリ出張所（現ヨーロッパ出張所）の書記であった永尾教昭氏（現海外部次長）が一時出向でコンゴブラザビル出張所に派遣された。教祖百年祭に所員が帰参する間の留守を預かるためだった。鼓笛指導という目的ではなかったが、永尾氏は音楽に精通していたので鼓笛隊の指導も行った。すぐに20名ほどの隊員が集まった。初期の頃からのメンバーも多く平均年齢はかなり高くなっていった。20歳以上の人も少なくなかった。永尾氏はまだ教えられていなかった曲の楽譜を見つけ、それを指導した。鼓笛隊用に編曲された現地の曲だった。新曲が加わるのは実に6年ぶりのこと。こうして、夕勤め後の練習が半年間に亘ってほぼ毎日続けられた。

教会における鼓笛隊活動の重要性を感じていたノソング氏は、常駐の日本人鼓笛指導員を望んでいた。過去の軋轢を一新し、ノソング氏と出張所が共に手を取り合って再出発しようという雰囲気の中、濱田道仁氏（現ハワイ伝道庁長）が「出張所長」という肩書きをあえて持たずに派遣されることになった。そしてその時の一員として私も派遣され、この鼓笛隊活動に携わっていくようになる。1986年6月のことだった。（つづく）